

令和 3 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ヒガチ ケンイチロウ
氏 名 樋口 謙一郎

研究期間 令和 3 年度

研究課題名 矢内原忠雄のアイランド認識の形成過程

研究組織

| | 氏 名 | 学 部 | 職 位 |
|-------|-------|------|-----|
| 研究代表者 | 樋口謙一郎 | 文化情報 | 教授 |
| 研究分担者 | | | |
| 研究分担者 | | | |

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

1920 年代に東京帝大で植民政策を講じ、日本の国際関係学の草分けとも称される矢内原忠雄のアイランド認識の学術的形成過程を分析する。矢内原は英国のアイランド統治に関する認識から当時の日本の朝鮮統治を類比的に批判したが、これまで彼のアイランド認識の学術的背景は十分に解明されているとは言い難い。本研究では、矢内原の公刊著作、未発表資料（講義ノートや著作草稿など）に基づき、矢内原が依拠した文献・資料を割り出し、そのアイランド認識がいかに形成されたのか（そしてそれが彼の朝鮮統治批判にどのように連続するのか）を考察する。また、アイランド各地の視察とヒアリング、矢内原に近い時代の人々の朝鮮認識の把握により、矢内原のアイランド認識の妥当性の分析も可能な限り試みる。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

矢内原の公刊著作、既存研究の精読を行った後、矢内原の生資料を調査して、矢内原が参照した文献・資料を割り出し、それらの内容を検討することで、矢内原のアイランド認識の形成過程を明らかにしていく。その推進方策として、次の作業を行う。

- (1) 矢内原のアイランド認識および朝鮮統治批判に関する公刊著作、研究文献を精読し、その基本的内容を確認する。
- (2) 矢内原の自筆講義ノートや著作原稿などの生資料を参照し、矢内原の公刊著作から抜け落ちた参照文献・資料などを割り出し、それらを収集・精読する。
- (3) アイランド各地の視察とヒアリング、矢内原に近い時代の人々の朝鮮認識の把握により、矢内原のアイランド認識の妥当性の分析も可能な限り試みる。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

2019 年来の新型コロナウイルス感染症をめぐる社会的状況（いわゆる「コロナ禍」）は本年度においても根本的な解決に至らず、関連規制により、本研究も十分に研究を行い得たとは言い難い。そのなかで、成しえた作業、得られた成果は主に次の通りである。

・上記研究方策中の (1) および (2) については、基本的なことは行った。(2) については琉球大学付属図書館の所蔵資料の分析を中心とし、主に琉球大学学術リポジトリのなかの「矢内原忠雄文庫植民地関係資料」を分析した。可能であれば琉球大学に出向き、資料の現物を確認させていただきたい点もあったが、コロナ禍における諸規制で断念せざるを得なかった。

・研究方策 (3) のうち、矢内原に近い時代の人々の朝鮮認識の把握については、島村抱月、若山牧水などの朝鮮認識に関する調査を行った。また、アイルランド各地の視察とヒアリングを行い、矢内原のアイルランド認識、およびそれにかかわる矢内原の朝鮮統治認識を相対的に把握するよう努めた。この際、National Museum of Ireland, The Little Museum of Dublin などの展示、スタッフの助言から得るものが多く、またアイルランド各地で知り合った市井の人々の歴史認識や英国観にも考えさせられることが多々あったことを、あえてここで記しておきたい。

・一連の作業の成果は現在とりまとめているところであり、一部必要な追加調査の後に論文執筆および学会発表などを行う予定である。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

| | | | |
|--------|---------|-----|---|
| ①矢内原忠雄 | ②アイルランド | ③朝鮮 | ④ |
| ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ |

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

一連の作業の成果は現在とりまとめているところであり、一部必要な追加調査の後に論文執筆および学会発表などを行う予定である。なお、年度内に公表した関連報告として次の小文を挙げておく。

・樋口謙一郎「朝鮮とアイルランド：『類似論』はいつどのように生まれたか」『東洋経済日報』2022年1月21日付

・樋口謙一郎「朝鮮とアイルランド(続)：変遷し利用され続けた『愛蘭』とは」『東洋経済日報』2022年2月18日付